

# 近代日本における家庭教育の担い手に関する一考察

——「私の履歴書 経済人」からの抽出事例を用いて——

多 賀 太

## 1. 問題の所在

近代日本の子育てに関する従来の研究においては、時代が下るにつれて母親が子育ての主たる担い手になっていき父親は子育てにおいて周辺化されていくと捉えられてきた<sup>1)</sup>。その根拠としては、第1に、医学書や育児書、家庭教育に関する雑誌や高等女学校の教科書などで、母性や母親による子育ての重要性が強調されていたこと、第2に、学校教育の拡大に伴い、家職の伝承を内実とした父親主導の教育が衰退し、家族における教育が学校教育の補完としての「家庭教育」<sup>2)</sup>へと特化していったこと、第3に、性別分業を基本とした核家族で生活する新中間層の拡大により、日常の子どもの世話や教育を担えるのが母親だけである家族が増えていったことなどが指摘されている（沢山 1990a, 小山 1990, 広田 1999, 海妻 2004）。しかし、これらの知見は、当時の教育や家政に関する刊行物における規範的な記述と社会構造上の変化に基づいて推測されている側面が大きく、必ずしも父親と母親の実際の子育ての実態をふまえたうえで得られたものではない。

確かに、近代の子育ての担い手とそのあり方の実態をとらえようとした研究はこれまでもいくつかあり、そのなかには、本研究と同様に自叙伝を題材としたものも見られる。吉田昇（1953）は、安政元年生まれから大正9年生まれまでの135人（男性104人、女性31人）の自叙伝を収集し、そこで言及されている家族における教育の担い手とその内実を描き、明治時代になると、社会の近代化に伴い、江戸期以来家族で行われてきた旧来の教育が通用しなくなってい

った様子を明らかにしている。小山静子と太田素子ら（2008）は、江戸末期から明治期生まれの著者の自叙伝に基づき、近代移行期における育ちと学びの諸相を描き出している。ただし、これらの研究の主たる対象時期は、父親が「家庭教育」の最前線から撤退していくとされる明治末期よりも前の時期である。

また、沢山美果子（1990b）は、明治30年代以降に育児雑誌に掲載された育児日記を分析し、初期の日記は父母双方によって書かれており、父親による子どもの献身的な世話の様子が理想的なものと位置づけられているのに対して、明治末期を境に父親は日記の書き手ではなくなり、「育児方針の提供者から協力者」に変わっていったことを見出している。ただし、ここでの「育児」は主として幼少期の子どもの身の回りの世話を指しており、より年長の子どもの世話や学校教育の補完としての「家庭教育」が十分に考察されているわけではない。

したがって、これらの先行研究には次のような課題が残されているといえよう。第1に、子育てにおける父親の周辺化という命題の根拠とされているのは、主として当時の刊行物における規範的記述であり、必ずしも当時の家族における子育ての実態が十分に明らかにされているわけではない。第2に、子育ての実態に言及している数少ない研究も、特定時点の特定の記録のみを扱ったものが多く、必ずしも長期的趨勢を実証的に確認しているわけではない。第3に、各研究によって、子育てに関わる営みのなかでも焦点が当てられている側面がまちまちであり、しかもそうした営みやその結果として子どもの側に生じる変化を表現する際にも「子育て」「教育」「育ち」「学び」などというより包括的で多様な言葉が用いられている。つまり、近代日本の家族において、誰が、どのような内容の子育てを、いつ頃まで、どの程度していたのかについては未解明な部分が多く、この点の解明は教育の歴史社会学研究における重要な課題の1つであるといえよう。

そこで本研究では、より客観的な手続きによって長期的な趨勢を把握するとともに、家族における「子育て」として括られる多様な営みを、各性質に応じて分節化したうえで、各タイプの子育てを、実際に誰が、どのような形で、どの程度担っており、それが時代や出身階層によってどのように異なっていたの

近代日本における家庭教育の担い手に関する一考察―「私の履歴書 経済人」からの抽出事例を用いて―（多賀）

かを明らかにする。そのうえで、近代における学校教育の誕生にともなって家族内に新たに生じ、母親にその遂行が委ねられるようになったとされる「家庭教育」が、本当に母親だけによって担われていたのかどうか、「家庭教育」においても父親は周辺化されていたのかどうかを探索する。

## 2. 研究方法

### 2-1. 資料―自叙伝「私の履歴書 経済人」

本研究では、資料として日本経済新聞社編「私の履歴書 経済人」全38巻を用いる。「私の履歴書」は、日本経済新聞の文化欄で1956（昭和31）年に連載が開始され現在まで続いている企画記事であり、政界、実業界、文壇などでそれぞれの時期に活躍している著名人がその半生を自ら綴ったものである<sup>3)</sup>。「私の履歴書 経済人」（以下「経済人」と略記）は、そうして紙上で取り上げられた人々の自叙伝のうち、実業家や財界人のものに限定して1巻あたり5人分から12人分を収録したものであり、これまでに全38巻243人分が刊行されている<sup>4)</sup>。

本研究の資料として自叙伝を選定した理由は次の通りである。公的領域において制度化された教育である公教育については、そうした性格ゆえに公的に記録が残されるが、制度化されていない私的な営みとしての子育ての実態が公的な記録として残されることはほとんどない。そうしたなかで、自叙伝は、その著者が私的領域における営みも含めた自らのこれまでの生活実態を書き留めているという点で、家族における子育ての実態を明らかにする手がかりを多く含んだ貴重な資料である。

また、自叙伝のなかでも、今回特に「経済人」シリーズを取り上げた理由は、カバーする人数と期間ならびに様式の統一性という点で他に類を見ないものだからである。「経済人」は、全243人と非常に多くの人数を取り上げており、しかも著者の出生年には50年以上の幅があるため、そこに描かれた生活構造が、地域、社会階層、時代によってどう異なるのかを比較検討するうえで十分な情報量の豊富さを備えている。また、その他の自叙伝のシリーズのなかには、それぞれの著者がそれぞれ異なった動機や経緯から執筆した自叙伝を収集してま

とめたものが多いのに対して<sup>5)</sup>、「経済人」は、50年以上にわたり、少なくとも晩年に同類の社会集団に属するようになった著者らが同じ読者層を想定してほぼ共通したフォーマットで書いてきた作品のコレクションであり、比較したい条件以外の諸条件がある程度統制されているという点でも本研究の目的にとって理想的な資料である<sup>6)</sup>。

## 2-2. 資料としての自叙伝の性質

もっとも、自叙伝に書かれている内容をそのまま客観的な事実として扱うことには慎重でなければならない。自叙伝に記された情報は、著者が、人生経験のうち執筆時点において記憶している情報の中から、さらに選択した情報であるという点で、二重のフィルターを通過した情報である（小山 2008：13-14）。すなわち、著者が忘れたことや、重要でないと思ったことは、実際に経験されていたとしても自叙伝には書き留められていない。しかも、同じ著者による作品であっても、想定する読者や、本人の執筆時の年齢、生活状況、時代状況などによって叙述内容は変わってくる。とりわけ「経済人」においては、叙述内容が、執筆時における社会情勢や読者のニーズやそれ以前に掲載された自叙伝の叙述スタイルに影響されていたり、それらをふまえて編集者による修正が加えられたりしている可能性も考えられる。そうした意味で、自叙伝は、筆者の主観性と歴史社会的拘束性を帯びたものである。

しかし、そのことは必ずしも自叙伝の価値を低めるものではない。これらの自叙伝が多く読者に好んで読まれているという事実は、そこでの記述が、読者にとって十分了解可能で意義あるものだと思われているという点で社会性を帯びていることも示している（小山 2008：15）。また、自叙伝には、現実に関心した出来事を著者がどのように認識・経験し、それによってどのような衝撃を受けたのかが、当人の生活に根ざしたかたちで生き生きと描かれているという点で、その他の史料にはないリアリティが兼ね備わっている。したがって、上に述べたような記述の主観性や歴史社会的拘束性を念頭に置きつつその内容を柔軟に解釈していくならば、自叙伝は、その著者が生きてきた社会のありよ

近代日本における家庭教育の担い手に関する一考察―「私の履歴書 経済人」からの抽出事例を用いて―（多賀）

うを理解するうえで、その他のタイプの史料を補いつつ独自の貢献を果たす貴重な資料であるといえよう。

また、著者が晩年に特定階層に位置づく男性ばかりで構成されていることから、ここでの知見をすべての層の人々に一般化することはできない。しかし、女性や成人後に他の階層に属することになった男性たちの受けた家庭教育については別の機会に追究することとし、本研究では、むしろ一定程度統制された属性をもつ集団内部で時代と出身階層の違いによる家庭教育の多様性を読み取れるという本データの性質をむしろ積極的に長所としてとらえている。

## 2-3. 分析の対象と方法

本研究は、「私の履歴書 経済人」全38巻243人の自叙伝を対象に、明治初期から戦前期の約60年にわたる期間に、子育ての担い手とその内実がどのように変化したのか、またそれらは地域や社会階層によってどのように異なっていたのかを、量的かつ質的な観点から明らかにしようとするものである。

この手始めに、本稿では、対象期間全体の大まかな傾向を把握することを目的として、同じ出生年の著者の中から1人だけを抽出したサンプルを分析対象とした。同じ出生年の著者が複数いる場合は最も早い時期に自叙伝が新聞に掲載された著者を抽出する方法を採り、最終的に1875（明治8）年生まれから1933年（昭和8）年生まれまでの57人分を分析対象とした<sup>7)</sup>。表1は、対象者の基本的属性、新聞掲載に関する情報、経験した子育ての内容、その担い手、そして特記事項をまとめたものである。

表1 対象者の属性と家族における子育ての担い手および内容

番号	生 年	氏 名	肩書き（掲載時）	新聞掲載年	執筆開始年齢	生育地域	家業・父職業	最終学歴
1	1875 明治8	杉山金太郎	豊年製油会長	1957	81-82	和歌山・農村	小農	大阪商業学校卒
2	1877 明治10	大谷竹次郎	松竹会長	1957	79	京都・市街	興行師	小学校卒
3	1878 明治11	三島海雲	カルビス食品工業社長	1966	89	大阪・農村	寺	仏教大学中退
4	1879 明治12	奥村政雄	日本カーバイド工業社長	1962	84	熊本・農村	地主	東大卒
5	1880 明治13	藍沢弥八	東証理事長	1959	79	新潟・農村	庄屋	日本法律学校卒
6	1881 明治14	平塚常次郎	日魯漁業社長	1958	76	函館・市街	呉服唐物商	ロシア語学校
7	1882 明治15	五島慶太	東京急行会長	1956	74	長野・農村	小作農	東大卒
8	1883 明治16	足立正	日本商工会議所会頭	1958	75	鳥取・酒井	庄屋	東京商大卒
9	1884 明治17	原安三郎	日本化薬社長	1956	98	徳島	藍会社支配人	早稲田大卒
10	1885 明治18	出光佐三	出光興産社長	1956	70-71	福岡・赤間	藍玉卸売	神戸高商卒
11	1886 明治19	中山均	日本銀行政策委員会委員	1956	70	浜松・市街	銀行経営・村長	早稲田大卒
12	1887 明治20	河田重	日本鋼管社長	1958	70	茨城・農村	旅館・農業	東大卒
13	1888 明治21	石田退三	トヨタ自動車工業社長	1958	69	愛知・農村	百姓	愛知県立第一中卒
14	1889 明治22	堤康次郎	前衆議院議長	1956	67	滋賀・農村	農家	早稲田大卒
15	1890 明治23	遠山元一	日興証券会長	1956	65	埼玉・農村	豪農→没落	中学中退
16	1892 明治25	高杉晋一	三菱電機相談役	1964	72	茨城・市街	警察官	東大卒
17	1893 明治26	山崎權二	山崎証券社長	1956	58	群馬・農村	小農	高等小学校卒
18	1894 明治27	大屋晋三	帝國人造絹絲社長	1958	63	群馬・農村	教師	前橋中学卒
19	1895 明治28	石毛郁治	東洋高圧社長	1957	62	千葉・漁村	商売	東京高等工業卒
20	1896 明治29	大川博	東映社長	1959	62	新潟・農村	村長	中央大卒
21	1897 明治30	新関八洲太郎	第一物産社長	1956	59	埼玉・市街	公務員	一橋大卒
22	1898 明治31	佐藤貢	雪印乳業社長	1959	61	札幌・郊外	上級役人	アメリカの大学
23	1899 明治32	井上五郎	中部電力・中経連会長	1967	67	東京・市街	実業家・政治家	東大卒
24	1900 明治33	堀久作	日活社長	1956	55-56	—	—	大倉高商卒
25	1901 明治34	嶋田卓彌	純の目ミシン工業社長	1965	63	京都・市街	開業医	小学校中退
26	1902 明治35	伊藤次郎左衛門	松坂屋社長	1958	55	愛知	呉服店	慶応大卒
27	1903 明治36	奥村綱雄	野村証券会長	1960	56-57	信楽→堺	菓子製造販売	京大卒
28	1904 明治37	稲山嘉寛	八幡製鉄社長	1965	61	東京・市街	小銀行	東大卒
29	1905 明治38	川又克二	日産自動車社長	1963	58	茨城・農村	農家で父は役人	東京商大卒
30	1906 明治39	永田雅一	大映社長	1957	51	京都・市街	呉服問屋→破産	大倉商業中退
31	1907 明治40	田口利八	西濃運輸社長	1973	66	長野・農村	中農	高等小学校
32	1908 明治41	井深大	ソニー社長	1962	54	栃木・杜宅	エンジニア	早稲田大卒
33	1909 明治42	宮崎輝	旭化成工業社長	1983	74	長崎・農村	地主	東大卒
34	1910 明治43	田中文雄	王子製紙会長	1983	73	長野・佐久	教育者	九大卒
35	1911 明治44	北裏喜一郎	野村証券会長	1979	69	和歌山・農村	農村文化人	神戸高商卒
36	1912 大正1	菊地庄次郎	日本郵船会長	1984	72	仙台・市街	呉服屋	東大卒
37	1913 大正2	豊田英二	トヨタ自動車会長	1984	71	愛知・郊外	織機工場経営	東大卒
38	1914 大正3	中山善郎	コスモ石油会長	1992	78	東京→長野	染色工場支配人	福島高商卒
39	1915 大正4	大杜義規	日本ハム社長	1984	69	香川・郊外	地主	高松高商中退
40	1916 大正5	竹田弘太郎	名古屋鉄道社長	1980	62-63	愛知・郊外	町長・教師・銀行家	早大卒業
41	1917 大正6	柏木雄介	東京銀行会長	1986	68	大連	銀行上級管理職	東大卒
42	1918 大正7	塚郷喜八郎	アシックス社長	1990	72	鳥取・農村	地主	鳥取第一中学卒
43	1919 大正8	春名和雄	丸紅会長	1990	70-71	神戸・市街	生糸商	東亜同文書院卒
44	1920 大正9	塚本幸一	ワコール会長	1990	70	仙台・市街	繊維商	八幡商業卒
45	1921 大正10	石橋信夫	大和ハウス工業会長	1991	70	奈良・山村	植林・製材	吉野林業卒
46	1922 大正11	諸橋晋六	三菱商會会長	1996	74	東京・市街	漢学者	上智大卒
47	1923 大正12	石井久	立花証券会長	1993	70	福岡・山村	小農	尋常小学校卒
48	1924 大正13	堀場雅夫	堀場製作所会長	1992	67	京都・市街	京大教授	京大卒
49	1925 大正14	永山武臣	松竹会長	1995	69	東京・市街	貴族院議員	京大卒
50	1926 大正15	賀来龍三郎	キャノン会長	1993	67	岡崎→別府	中国で様々な職	九大卒
51	1927 昭和2	山路敬三	日本テトラパック会長	1997	69	静岡・市街	鉄道土木請負	東大卒
52	1928 昭和3	根本二郎	日本郵船会長	2001	73	東京・市街	小学校長	東大卒
53	1929 昭和4	八城政基	シティバンク在日代表	1997	68	東京・市街	薬局経営	東大卒
54	1930 昭和5	大賀典雄	ソニー名誉会長	2003	72-73	静岡・沼津	材木商	東京芸大卒
55	1931 昭和6	牛尾治朗	ウシオ電機会長	1999	67-68	姫路・市街	電力・銀行等経営	東大卒
56	1932 昭和7	稲盛和夫	京セラ名誉会長	2001	69	鹿児島・市街	印刷業	鹿児島大卒
57	1933 昭和8	飯田亮	セコム創業者	2001	68	東京・市街	酒卸売	学習院大卒

進路形成			知 育			その他			家族における子育て・教育に関する特記事項
進学 指南	職業 指南	職業 教育	学識 伝達	文化 伝達	外部資 源利用	徳育	体育	世話	
—	—	—	—	—	—	—	—	—	家庭教育については親から物を大切にしようしつけられたとの記述のみ。
—	父	—	—	—	—	母	—	—	一家で商売をしており、勉強よりも家業の手伝い優先。
—	—	母	—	—	—	—	—	—	頼りない父。働いて教育費を稼ぐ。父は家業を継ぐこと、母は立身出世を願う。
—	—	—	—	—	—	—	—	—	父は教育者だったが家庭教育についての具体的な記述なし。
—	—	—	—	—	—	—	—	—	父の子を思う気持ちのみ記述。
—	—	—	—	—	—	—	—	—	おじへの言及が多く、家庭教育の具体的な記述なし。
—	—	—	—	—	—	父・母	—	—	両親による薫陶に感謝する言葉はあるが家庭教育の具体的な記述なし。
—	父	父	父	父	父・母	父・母	父	—	知育・徳育の具体的な記述はほとんどなし。
—	父	—	—	—	—	—	—	—	身体障害のため学校に行けない間、親と家庭教師で学校教育の内容をカバー。
—	父	父	—	—	—	—	—	—	両親が非常に良かったとの記述があるだけ。
—	—	父	—	—	—	—	—	—	父の経営する銀行を継ぐ。
父	父	—	—	—	父	父	父	—	中学入学前まで里子に。父は自分の夢を息子に託す。中学の先生のお供をして学ぶ。
—	—	—	—	—	—	養母	—	—	中学5年間養母に育てられる。養母による立身出世規範の教化。
—	祖父	—	—	—	—	—	—	—	5歳で父をなくす。あらゆる面で祖父の影響大。
—	父	—	—	—	父	—	—	—	父と校長の判断により、遠縁の政治家の哲生になって学ぶ。
—	—	—	—	—	—	—	—	—	反面教師としての父。中学教師の厚意による特別教育。
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
父	—	—	—	—	—	父	—	—	父は正規の学歴はないが漢学の素養あり。
父	父	—	—	—	—	父	—	—	父は社会の変化を敏感に察知し、息子の立身出世のために進路指南。
—	—	—	—	—	—	—	—	—	家庭教育への言及なし。
—	父	—	—	父・母	父・母	父・母	父	父	経済的に息子を支援。
父	父	—	—	—	父	父	父	母	父は自分の果たせなかった夢を子どもに託し、折に触れて指南。
—	—	—	—	父	父	父	父	—	父への言及が多く、連載1回目はほとんど父についての記述。
—	—	—	—	—	—	—	—	—	8歳のときに父を亡くしたため父の記述はほとんどなし。
—	母	父	—	—	父	父	父	—	教育熱心な父を12歳でなくす。母は反学歴主義で苦労して働き家族を養う。
—	—	—	父	父	父	祖父	父	父	父は仕事で忙しいうえに、放任主義。祖父が幼少時代のしつけ。
—	—	—	父	父	父	父	父	父	当時の中産階級には珍しく徹底的自由放任主義との記述あり。
父	—	—	父・祖父	—	祖父	祖父	父	—	両親とも進歩的な考え。基本的に怒らない。父と祖父の影響大。
—	父	—	—	—	—	—	—	—	—
—	母	—	—	—	—	母	—	—	父親は放浪者。家を再興してほしいという母の期待に応えるために努力。
—	—	—	—	—	—	—	—	—	父が借金の保証人になって困窮。母が上級学校進学を勧めたが本人が拒否。
母	父	—	母	—	祖父	父	父	—	3歳の時父死亡。母は日本女子大卒。
父	—	—	—	父	父	父	父	母	師範学校進学を望む両親を校長が説得し中学に進学。
—	—	父	—	—	父	父	父	母	県外脱出志向の強い地域。
—	—	—	父	父	父	父	父	母	父は明治の田舎文化人。16歳で和歌山から神戸に進学し母が同居で世話。
父	父	—	父	父	父	父	父	—	父は彼に進学よりも商売を継ぐことを望む。
—	父	父	父	父	父	父	父	—	小学校入学の年母が死亡。
—	母	—	—	—	—	—	母	母	5歳で父死亡。母と二人で生活し自主性を重んじる子育て。
—	—	—	—	—	—	—	—	—	呑気な子どもを叱らず金使いが荒く母に苦労を掛ける父。家庭教育の記述なし。
父	父	—	—	—	父	父	父	—	成人期なくても父の意向を気にせざるを得ないほど父の影響は強い。
父	—	母	—	—	—	—	—	—	両親は典型的な性別分業。父の忠告は命令も同然。教育熱心な母。
—	父	—	祖父	—	—	祖父・母	父	父	父は熱々と煙を掛すタイプ。父よりも祖父の影響大。
—	母	父	—	—	—	父	父	—	経済的理由で高等学校への進学を父に断念させられる。
—	父	父	—	—	—	父	父	—	家庭教育の具体的な記述なし。
—	父	父	—	—	父	父	父	—	—
—	父	父	—	—	父	父	父	母	子どもの自主性を重んじる父。近所の文化人による感化、家庭教師による教育。
—	父	父	—	—	—	—	—	—	学問に理解を示さず進学に反対。愚直、聡明で先見の明のある彼と正反対。
父	—	母	父	父	父	父・母	父・母	父	両親とも教育熱心。教育環境重視し転居を繰り返す。幼少時自由、中学以降厳格。
—	父	—	母	—	—	父・母	父・母	—	—
—	父	父	父	父	父	父・母	父・母	母	父は学者側で放任主義。両親の下で子育てすべきとの考え。父には敬語で話す。
—	父	父	父	父	父	父・母	父・母	母	跡取りとして養父母に育てられる。養父は仕事で家に不在がら。
—	—	母	母	母	母	父	父	父	母は教養に富み、典型的な教育する母。
—	—	—	—	—	—	—	—	母	中学で両親をなくす。
—	—	父	—	—	—	—	—	母	親は直接教育というよりも文化的環境を整える。家庭教師による教育。
—	父	父	父	父	父	母	母	父	父は父だったが祖父から家業の経営を引き継ぎ、さらに戦後は遠征に合う。
—	父	父	父	父	父	母	母	父	中学校長が親を説得して進学。伯父による文化的感化の影響大。
—	父	父	父	父	父	父・母	父・母	父	厳格な父。一度も懲められたことはない。

分析の手順としては、①まず、57人の自叙伝を読み、著者の基本的属性や子育てに関する事項を、1人1シートに記録していった。②次に、そうして得られた子育ての具体例をふまえて、家族における子育てに関わる営みを次の通り上位3つ、下位9つのカテゴリーに分類化した。

・『進路形成』

「進学指南」「職業指南」「職業教育」

・『知育』

「学識伝達」「文化伝達」「外部資源利用」

・『その他』

「徳育」「体育」「世話」

③その上で、各著者の基本的属性と、各カテゴリーに該当する子育ての担い手、ならびに特記事項について一覧表に整理した。④そして、自叙伝の著者たちが家族において経験した子育ての内実ならびにその担い手について、時代と階層によってどのような共通性と差異が見られるのかを検討していった。

### 3. 結果の概要

#### 3-1. 対象者の属性

分析対象となった自叙伝の著者たちの属性に関する全体的傾向を表1で確認しておく。

まず、日本経済新聞掲載年、つまり自叙伝が発表された年については1957年から2003年まで47年の幅があるが、全57件中22人分と約4割が、1950年代後半に執筆されている。これは、同年生まれの著者が複数いた場合には最初期に掲載されたものを抽出するという方法を採用したことによる。執筆時の著者の年齢は、51歳から98歳で平均68.8歳である。8人については自叙伝に誕生日が記されておらず、執筆開始時にその年の誕生日を迎えていたのかどうか不明であるため、執筆開始年齢に1年の幅を持たせて記載している。

近代日本における家庭教育の担い手に関する一考察―「私の履歴書 経済人」からの抽出事例を用いて―（多賀）

出身地の地域的特性を見ると、明治生まれ、特に明治30年以前に生まれた世代では、圧倒的に農村出身者が多いのに対して、世代が若くなるにつれて、大都市や地方都市出身者の割合が高くなる傾向が見られる。それにともない、父親の職業についても、明治期前半生まれでは農業や地代で生計を立てていた割合が高いのに対して、明治期後半生まれになると商売人の割合が増え、さらに大正期生まれ以降では、経営者、企業管理職、専門職などの割合が高くなる傾向が見られる。

出身家庭の経済状況について見ると、どの時代の対象者も貧しい家庭から裕福な家庭まで様々な経済状況の家庭から輩出されているが、どちらかといえば、明治期前半、明治期後半、大正期以降と出生時期が下るにつれて、より裕福な家庭の出身者の割合が高くなる傾向が見られる。すなわち、日々の生活自体もままならないような家庭の出身者の割合が減り、家業や雇用労働により日常生活には差し障りない収入を得られている家庭や、資産等により親が就労しなくても生活できたり、親が就労してはいるものの高級文化を頻繁に楽しむ余裕があったりする家庭の出身者の割合が増えている。

#### 3-2. 家族における子育ての全体的傾向

表1の右半分には、上に述べた「子育て」の9つのカテゴリーに該当する営みのうちのどれに言及があったのか、また言及があった場合それを誰から受けたと述べられているのかを示している。

まず、全体を見渡してみると、どちらかといえば母よりも父への言及の方が多いことがわかる。父への言及がのべ84件、母への言及がのべ34件、うち父母両方への言及がのべ9件、祖父への言及がのべ7件である。もちろん、これらの件数はカテゴリーの分け方によって大きく左右されるものであり、たとえば、比較的近い関係にある「進学指南」と「職業指南」を1つのカテゴリーにまとめたとすれば、カウントされる父への言及頻度は減少する。それでも、父への言及と母への言及を比較すると、その頻度においても記述量においても、父への言及の方が多い傾向は明らかである。

しかも、次節以降で詳しく述べるように、母への言及は、単に頻度や記述量が少ないだけでなく、その内容も父に比べるとそれほど詳細ではない。特に、母の学歴に触れた記述はほんの一部の者にしか見られない。同様の傾向は、先に触れた吉田（1953）の研究においても指摘されている。吉田は、135人の自叙伝のなかで、いくつかの例外を除いて「母の描写は極めて少な」く、「描かれている際も、個性的な印象はほとんどなく、自分のために働いてくれる母に対する感謝の念が書かれているだけのことが多い」と述べている。

こうした母への言及の少なさの理由としては、事実として、母による子育てがそれほど行われていなかった可能性も考えられる。戦前の裕福な家庭には乳母や家政婦がいることが珍しくなく、子どもたちの身の回りの世話の少なくともある部分は母ではなくそれらの人々によって担われていたに違いない。また農村では、早くとも昭和30年代頃までは、母の主たる仕事は農作業や家事労働であり、小さな子どもの世話はもっぱら祖父母や年長のきょうだいによって担われるのが一般的であった（須藤 2006）。吉田も、「当時の家庭が一般的に多産である上に、母が家事労働の一切を背負っていた」ことから、母には子どもと親密に接する時間的精神的余裕がなかった可能性を示唆している。

他方で、実際には母は日頃から子育ての大半を担っていたにも関わらず、そのことが自叙伝に書き留められていない可能性も同時に考えておく必要があるだろう。吉田が指摘しているように、「母から受ける印象が、あまりに日常的」であるため「書くとなると何を書いてよいかわからない」という側面もあるに違いない。それ以外にも、たとえば本研究の分析対象についていえば、著者自身が男性であることから父とのつながりがより意識化された側面や、日本経済新聞の読者のほとんどが男性であることを意識して母のことがあまり書かれなかった可能性、さらには、著者の世代的感覚ならびに執筆時の時代的風潮から大の大人の男性が母のことを書くことがはばかれた可能性などが考えられる。いずれにせよ、著者の主観的選択を通じて執筆されるという自叙伝の性質をふまえると、父に比べて母についての言及が少ないからといって、必ずしも父に比べて母との関係が疎遠だったとは限らない点は念頭に置いておく必要がある

近代日本における家庭教育の担い手に関する一考察—「私の履歴書 経済人」からの抽出事例を用いて—（多賀）  
う。

こうした全体的傾向をふまえたうえで、次に、著者たちの世代と出身階層に注意を払いながら、家族における子育ての担い手とその内実をより詳しく見ていくことにする。

## 4. 進路形成への関与

まず、『進路形成』について「進学指南」「職業指南」「職業教育」に分けて見ていくことにする。

### 4-1. 進学指南

ここでいう「進学指南」とは、上級学校への進学について、希望を伝えたり、アドバイスをしたり、さらには強く命令したりすることを指す。

家族成員による進学指南について言及があったのは、57人中11人である。母について言及されているのは、幼少期に父が死亡した1件のみであり、その他の10件はすべて父への言及となっている。

進学指南への言及は、新中間層の出身者に多く見られる。単に上級学校へ進学するかどうかや、進学する学校種について指南することにとどまらず、なかには、各学校段階での受験校や大学の学部まで細かく父が指示した例も見られる。

例えば、竹田弘太郎（大正5年生、父：教師・町長・銀行家）は、小学5年のときに、父から愛知一中を受けるように言われ、その年は不合格だったが、それによって度胸が付いたとのことで、小学6年の再受験で合格している。さらに、中学4年で高等工業に進もうとしたが履修科目の関係で進めず、高等学校の理科へ行こうと考えていたが、父によって早稲田の商学部に進学させられている。

竹田と1歳違いの柏木雄介（大正6年生、父：銀行上級管理職）は、12歳で帰国子女として編入した暁星学園で中学3年まで学んだ頃、親類たちから一高をはじめとして進学についてあれこれと指南されるようになったが、父は「進

学のためにあくせく勉強する必要はないし、無駄だ」として、雄介を中高一貫の成城学園高校尋常科（中学に相当する4年制）の4年に転校させている。また雄介は、高等科に進む際に、医者にあこがれて「理乙（ドイツ語）」に進もうとしたが、父に反対されて「文甲（英語）」を選んでいる。

#### 4-2. 職業指南

ここでいう「職業指南」とは、就くべき職業について、希望を伝えたり、アドバイスをしたり、口利きをしたり、さらには強く命令したりすることを指す。家族による職業指南に言及があったのは24人であり、父19件、母4件、祖父1件となっている。母や祖父による指南について具体的な記述があるのは、幼少期に父を亡くしていたり父が放蕩者であったりしたケースのみであり、職業指南の具体的な記述のほとんどは父についてのものである。

職業指南に関する記述のほとんどは、あくまで親の意向を伝える程度のものであるが、なかには、半ば強制的に進路を決められているケースも見られる。

後者のケースは、さらに大きく3つのパターンに分けられる。1つ目は、子どもが上級学校への進学を希望していたものの、父が経済的理由や学問への無理解からそれを許さず、子どもを就職させているというものである。春名和雄（大正8年生、父：生糸商）は、中学4年のときに、高等学校に行って大学を狙いたいと考えて父に相談したが、「出す金がない、中学でやめや」と言われて高校進学を断念している（ただし、彼の場合、その後県費でいける東亜同文書院の試験に合格し、父から許可をもらって進学している）。石井久（大正12年生、父：小農）は、小学校で成績優秀であり、卒業時に村長や校長が上級学校への進学を勧めてくれたにもかかわらず、「昔気質」で学問に理解を示さない父は、「農業は立派な職業だから」といって彼の進学を許さなかった。

2つ目のパターンは、学校教育を終えた後に、父が職を決めるというものである。出光佐三（明治18年生）は、外交官になるつもりで神戸商高に進んだが、父から「役人になるよりも自分の仕事をやれ」と言われて、卒業後に丁稚奉公に入っている。遠山元一（明治23年生、父：豪農から没落）は、遠縁の政治家

近代日本における家庭教育の担い手に関する一考察—「私の履歴書 経済人」からの抽出事例を用いて—（多賀）

の書生になって中学で学んでいたところ、父の従弟と縁のある証券会社が小僧を必要としていたことから、父によって学業を断念させられ、その会社に小僧として送られている。

3つ目のパターンは、学校教育終了直後であれ、就職後であれ、父の意向により家業を継がせられるというものである。中山均（明治19年生）は、早稲田大学卒業後第百銀行に勤めたが、母が亡くなったのをきっかけに父から郷里の浜松に呼び戻され、父の経営する浜松銀行へ入行している。

#### 4-3. 職業教育

ここでいう「職業教育」とは、息子が将来就くであろう職業を見越して、実際に仕事を手伝わせたり、その仕事に直結するものを経験させたり、直接手ほどきをしたりすることを指す。

家族成員による職業教育について言及があったのは57人中10人であり、言及されたその担い手はすべて父である。明治期生まれによる言及は2件のみであり、8件は大正期以降に生まれた世代に集中している。

ほとんどは、息子に家業を継がせることを見据えて家業や類似の職を手伝わせるというものである。たとえば、中山均（明治19年生）は、大学卒業後、銀行家の父から「人間は学校を出ただけではだめだ。誰か偉い人について、みっちり修業しなきゃあいかん」と言われ、地元の資産家で慈善事業家の「カバン持ち」をさせられている。豊田英二（大正2年生）は、小学生の頃には父が経営する織機工場が遊び場となっており、電話で織物の相場を聞いたり、父から相場の問題を出されて答えるなどという経験をしている。また高校の夏休みには、家業の紡績工場で実習をさせられている。石橋信夫（大正10年生まれ）は、「理屈は学校で、実地は家業で」が口癖の父によって、家業の林業の仕事を山のようにさせられたと述べている。

以上の結果から、上級学校に進学させるかどうか、進学させるとすればどのような学校に、またどの学校に進学させるか、学校教育終了後にどのような職に就かせるか、そのためにどのような教育をするかについては、明治初期から

昭和初期まで、階層を問わず、一般には母親ではなく父親が指南していたことがうかがえる。遠山元一（明治23年生、父：豪農から没落）、竹田弘太郎（大正5年生、父：教師・町長・銀行家）、柏木雄介（大正6年生、父：銀行上級管理職）らがそろって「父の命令は絶対だった」と述べているように、旧民法下での戸主としての父親の意向は、彼らの進学および就職において、絶大な影響を持っていたことが推測される。

## 5. 知育への関与

『知育』については、「学識伝達」「文化伝達」「外部資源利用」に分けて見ていくことにする。

### 5-1. 学識伝達

ここでいう「学識伝達」とは、学問的な知識や学校教育に関わる知識を直接授けることを指す。家族成員による学識伝達について言及があったのは57人中8人と少なく、言及されたその担い手の内訳は、父3件、母4件、祖父1件である。これらのうち、祖父についての言及は、いろいろの灰に火で字を書いて教えてくれたという鬼塚喜八郎（大正7年生、父：農村地主）による簡単な記述があるのみである。

明治期生まれの著者の間で、母親による「学識伝達」について言及があるのは、奥村政雄（明治12年生、父：農村地主）のみである。彼の父は、自宅に塾を開いて村の子どもや若者に漢学を教える教育者であった。政雄は、父からの直接の知識伝達には言及していない一方で、「母から口伝えに孝経の素読を教えられ、いまでもその一部を覚えている」と述べている。

そのほかの明治期生まれの著者は、皆父による「学識伝達」に言及している。原安三郎（明治17年生）は、身体障害があつて思うように学校に通えなかったため、会社支配人だった父が家で四書五経、孟子、春秋などを教えていたと記している。

田中文雄（明治43年生）は、地方の地主で教育者だった父について、子ども

近代日本における家庭教育の担い手に関する一考察―「私の履歴書 経済人」からの抽出事例を用いて―（多賀）

の教育にはとりわけ熱心であり、彼の兄たちは小学校在学中に必ず『近古史談』を一冊読了させられており、彼も含めて、毎年正月二日には家族一同を集めて教育勅語を奉唱させた後、各自が読書する「読み始めの日」という行事を設けていたと記している。

学校教育のレベルを超えて、子どもに対して西洋の科学的合理主義的教育を徹底して教育しようとしていた例が、嶋田卓彌（明治34年生）の父である。開業医をしていた父は、卓彌が小学4年のときから、彼と兄を毎日1時間自分の前に座らせて、彼らに漢籍と英語を教えている。泣き出しても容赦せず冷たい水で洗面を命じてまたやり直しさせるという徹底ぶりです。1年半の間に中学3、4年程度のものまでマスターさせたという。また、日頃から徹底した科学的、合理主義的教育を施しており、たとえば、日曜ごとに、居住地であった京都の名所、旧跡に彼らを連れて行つては地理、地質、鉱物、動植物などの話を聞かせてやり、帰ったら必ず彼らにその日の「紀行」を書かせていたという。また、「夏みかんがすっぱい」といえば重曹をかけて中和作用を説明したり、食べ物が腐ったら細菌学の講釈をしたりと、何が迷信で何が合理的かをその都度解いていたという。

他方、大正期以降生まれで母による「学識伝達」への言及のあった3人は、いずれも新中間層出身者である。

柏木雄介（大正6年生）は、銀行副支配人の父の海外赴任により、中国で生まれてアメリカで育ち、12歳で帰国している。父は仕事のため家には不在がちであり、子育てはもっぱら母の役割であった。日本語や日本の教育に息子を適応させるために必死だった母は、教育勅語を暗記できない彼のために、彼の入浴中に脱衣所で大きな声で教育勅語を読んで聞かせたり、習字が苦手な彼のために手本を書いてやり、その上に置いた半紙に母の字をなぞらせて習字の練習をさせたことが記されている。彼の高校卒業時には、父が母に「これまで雄介の教育を任せきりにしてきたが、ご苦労様でした」と金一封を渡したという。

堀場雅夫（大正13年生）の場合も、京大教授だった父が大変教育熱心であったが、附属小学校入学のために母に予想問題を出してもらって一夜漬けで勉強



して合格したとの記述があるように、学校教育の補完としての教育は母が担っていたようである。

根本二郎（昭和3年生、父：小学校長）は、少年時代6年間にわたり、外から「遊び疲れて帰ってくると」「小学館の参考書で母から予習、復習をやらされた」と記している。

以上のように、限られた事例数ではあるが、同じ「学識伝達」であっても、明治期生まれで見られたのは地主教養層において江戸期以来の学識を父親が伝授するというパターンであるのに対して、大正期以降生まれでは都市中間層において学校教育の補完としての家庭教育を母親が担うというパターンが顕著になる傾向がうかがえる。

## 5-2. 文化伝達

ここでの「文化伝達」は、学術的知識や学校教育に直接関係する知識以外に、教養を深めたり見識を広げたりという趣旨で親が直接手ほどきをしたり学びの機会を与えたりすることを指す。家族成員による文化伝達について言及しているのは57人中13人であり、父から碁打ちを習ったという足立正（明治16年生、父：庄屋）を除けば、すべて明治30年代生まれ以降の著者である。

母について言及しているのは3人だけである。そのうち新関八洲太郎（明治30年生、父：公務員）は、両親によく義太夫席に連れて行かれたと述べているだけである。井深大（明治41年生）の場合は、父を3歳で亡くしているが、日本女子大学卒という当時の女性としてはかなりの高学歴をもつ母が、日曜日ごとに博覧会や博物館に連れて行くという教育熱心ぶりを発揮している。松竹会長の永山武臣（大正14年生、父：貴族院議員）は、子どもの頃に母が芝居見物に行くたびに帰ってきて舞台の話を開かせられており、母を喜ばせるために小遣いをためて母と歌舞伎を見に行ったことが歌舞伎の世界に入り込むきっかけとなったと述べている。

一方、父による「文化伝達」についての言及は11件あるが、その具体的な仕方は、大きく次の3つのパターンに分けられる。1つ目は、職場や出張先に息

近代日本における家庭教育の担い手に関する一考察―「私の履歴書 経済人」からの抽出事例を用いて―（多賀）

子を同行させるというものである。東京で育った井上五郎（明治32年生）は、小学生のときに実業家で政治家であった父の仕事のお供として北海道に数回連れて行かれたことに触れている。愛知県在住だった豊田英二（大正2年生、父：織機工場経営）は、子どもの頃、夏休みや春休みごとに、父が東京や大阪などの取引先を回る際に家族で同行し、そこからさらに足を延ばして全国各地を観光していたという。静岡で暮らしていた山路敬三（昭和2年生）の場合、父は鉄道土木請負仕事のためほとんど家には帰らないうえに、「男の職場に家族や子供を連れて行かないという方針だった」が、東京の事務所にだけは時々連れて行ってくれたことを回想しつつ、「広い世間を見せて、それなりに教育しようとおもったのだろう」と述べている。

「文化伝達」の2つ目のパターンは、先進文化を体験させるものである。仙台で呉服屋を営んでいた菊地庄次郎（大正元年生）の父は、商売で毎月東京や横浜に出向いて西洋風の先進的な文化を身につけており、庄次郎が小学生の時には、周りの子どもがみな着物姿だったなかで彼ら兄弟だけに洋服を着せたり、仙台一の洋食屋に家族を連れて行ってナイフとフォークの使い方を実演して見せたりしていたという。堀場雅夫（大正13年生）の父（京大教授）は、家族を、休日には繁華街、百貨店、レストランなどに連れて行ったり、自動車がまだ珍しかった当時、大阪―京都間を移動するためにわざわざタクシーに寄せたり、東京や宮城まで見物に連れて行ったりしたことを述べている。

「文化伝達」の3つ目のパターンは、父が趣味としてたしなんでいることを息子に教えるというものである。先に述べた足立正（明治16年生、父：庄屋）だけでなく、北浦喜一郎（明治44年生、父：農村文化人）も父から碁を教え込まれており、そのおかげで15歳の時に近隣で一番の碁打ちになったと述べている。そうした農村の地主層とは対照的に、伊藤次郎左衛門（明治35年生、父：呉服店経営）、奥村綱雄（明治36年生、父：菓子製造販売業主）、稲山嘉寛（明治37年生、父：銀行経営）といった都市在住の裕福な家庭の出身者たちは、青年期になってから、父にカフェや花街に連れて行かれてそこでの粋な遊び方を指南されたことを述べている。

### 5-3. 外部資源利用

ここでいう「外部資源利用」とは、家族成員の意志により、家庭教師や教育産業など、正規の学校教育でもなく親からの直接の指南でもない方法で、学業や文化に関する学びの機会を子どもに与えることを指す。家族による外部資源利用に言及しているのは57人中10人であり、そうした営みに少なくとも母の意向も含まれているのが3件、明確に父の意向として述べられているのが7件である。

外部資源利用のパターンは、大きく3つ見られる。1つ目は、いずれも明治20年代生まれの農村出身者が言及しているものであり、他人のお供をさせたり他家へ書生として預けるという方法である。河田重（明治20年生）の父（農業・旅館業）は、東大出身の中学教師が開いた寮に重を入れて厳しい生活を強いており、その教師が上京する際にも頼み込んで重をお供につけさせている。遠山元一（明治23年生）の父（豪農から没落）は、高等小学校卒業後に経済的制約から上級学校に進学できない元一に勉学の機会を与えようと、東京にいる遠縁の政治家に頼んで元一を書生として預けている。

2つ目のパターンは、家庭教師をつけるというものである。原安三郎（明治17年生）の父（会社支配人）は、安三郎が身体障害を理由に中学を退学させられた後、家庭教師を雇い、当時中学で教わるほとんどの科目を彼に学ばせたという。諸橋晋六（大正11年生）の父（漢学者）は、晋六が東京高師附属中学3年のときサッカーに没頭して勉強をおろそかにしてしまうようになると、文理大の学生を家庭教師につけて彼に数学を習わせたという。

外部資源利用の3つ目のパターンは、雑誌や本を買い与えるというものである。新関八洲太郎（明治30年生）は、東京で小学校に入学したての頃両親に義太夫席によく連れて行かれ、そのたびに退屈で大泣きしていたが、泣き止むのを条件に買ってくれるものの1つに「少年」という雑誌があったと述べている。東京高師附属小学校に通っていた諸橋晋六（大正11年生）は、周りの子どもたちの間で人気だった「少年倶楽部」を小学5年になってようやく月極でとってもらえるようになったことに触れている。根本次郎（昭和3年生、父：小学校

近代日本における家庭教育の担い手に関する一考察―「私の履歴書 経済人」からの抽出事例を用いて―（多賀）

長）の場合、父を漢学者にもち文学好きだった母が4人の子どもの世話と教育を一手に引き受けており、子どもたちが本を買うことに文句を言わなかったと述べている。

これら3つのパターンのいずれとも異なる「外部資源利用」の最も顕著な例として挙げられるのが、堀場雅夫（大正13年生）の父である。理学博士で京大教授だった父は、「孟母三遷」に倣ってか、雅夫の生育環境を考えて彼が大学に行くまでに三度居住地を変えさせている。雅夫は、両親ときょうだいたちとともに、もともと京都市内で祖父母と一緒に暮らしていた。しかし、雅夫が4歳のとき、父が「子供は自然に恵まれた所で育てた方がいい」と考えたらしく、母と3人の子どもたちをつれて兄弟とともに宇治山科へ引っ越してしまった。雅夫は、父の意図通りに、引っ越した先で弟と野山を駆けまわっていたと記している。ところが、雅夫が小学校に入る直前になると、父は彼を京都府師範学校付属小学校へ通わせるため、再び家族で京都市内へ引っ越してきて、彼らを当時の先進的な文化にたっぷりと触れさせている。さらに、高校受験の勉強に批判的だったこともあり、高校入試なしで7年間学べる興南中学尋常科への進学を勧めて雅夫に寮生活を送らせている。こうして環境が変わったことにより、小学校のとき以来苦しめられていた雅夫のリウマチが回復している。

以上、「学識伝達」「文化伝達」「外部資源利用」という3つのカテゴリーに分けて、家族による『知育』の実態について見てきた。確かに、「学識伝達」のうち、大正期生まれ以降の新中間層における狭義の家庭教育、すなわち子育てに関わる営みのうち学校教育の補完と見なされる営みについては、従来の学説通り、主として母親が担っていた様子がうかがえる。しかし、学校教育の補完に限らない「学識伝達」や「文化伝達」、「外部資源利用」の判断などを含めみると、全体的には、世代や出身階層に関わらず、『知育』はむしろ父親主導で行われていた傾向がうかがえる。

### 6. その他の子育てへの関与

ここでは、家族成員による子どもへの教育的配慮に基づく働きかけで、これ

までに扱ってきたカテゴリーに収まらないものを「徳育」「体育」「世話」に分けて見ていく。

### 6-1. 徳育

ここでいう「徳育」とは、日常生活における礼儀作法のしつけから人間の生き方に関わる思想にいたる規範や価値観を教え諭す行為を指す。家族による徳育について言及しているのは、57人中27人であり、その担い手として父に言及しているケースが19件、母に言及しているケースが10件、祖父に言及しているケースが4件である。

祖父について言及のある4件のうち、1件は幼少期に父が死亡したケース（井深大、明治41年生）であり、あとの3件は、地主や家業を営む3世代同居家族において仕事で忙しい父に代わって祖父がしつけをしていたという伊藤次郎左衛門（明治35年生、父：呉服商）、稲山嘉寛（明治37年生、父：銀行経営）、鬼塚喜八郎（大正7年生、父：農村地主層）らのケースである。

母について言及のある10件のうち、多くは両親ともに「しつけに厳しかった」といった抽象的記述が多いが、いくつか具体的な様子が描かれている。農村出身者の例として、田口利八（明治40年生、父：中農から没落）の場合、父が借金の保証人になって借り主が夜逃げしたことから家族が困窮していくなかで、「この母なくて今日の私はありえなかった」と記すほど母による厳格なしつけを受けたという。例えば、言うことを聞かないと母から指にお灸をすえられ、彼が高等小学校卒業近くなると、母は彼の腕白を直したい気持ちと、将来出世して役人になってほしいとの願いから「茶断ち」し、「金銭では他人に絶対迷惑をかけてはいかん。もしその場はうまく逃げられても、孫子の代まで必ず後ろ指を指される」との教を説いてきたという。

一方、「当時の中産階級としてはめずらしく、徹底した自由放任主義で育てられた」という奥村綱雄（明治36年生、父：菓子製造販会社経営）の記述からもうかがえるように、明治末期から大正期にかけての都市中間層では厳しいしつけが一般的だったと考えられる。そうしたなか、堀場雅夫（大正13年生、父：

近代日本における家庭教育の担い手に関する一考察―「私の履歴書 経済人」からの抽出事例を用いて―（多賀

京大教授）の母は、人の集まっている所へ寄っていくな、人の欠点を口にするな、挨拶をきちんとしろ、屋台の食べ物を買うなといった、庶民との差異化を図るような生活規範を徹底して説いていたという。

父親による徳育への言及については、単に「しつけに厳しかった」といった抽象的な記述や、たとえば、大屋晋三（明治27年生、父：農村教師）のように、小学4年のときにラブレターを書いたのが見つかり父にさんざん油を絞られたといった特定のエピソードに触れただけの記述を除けば、大きく分けて2つのパターンが見られる。

1つは、農村の中・上農層で、学校教育を通して息子に社会的地位形成をさせることを狙った立身出世型の訓導である。明治20年代生まれの例として、茨城県の貧しい地域で農業と旅館業をしていた河田重（明治20年生）の父は、かつて武士になろうとして水戸まで剣術を習いにいったこともあったそうで、重の学修状況に対して特に目を光らせており、彼が中学生の頃勉強をそっこのけで釣りばかりしていたときには釣り竿を折ったという。千葉の漁村で海産物を扱う商売をしていた石毛郁治（明治28年生）の父は、漁業が遠洋式に変わって家業が衰退していくなかで、貧しいながらも息子をなんとかして上級学校に進ませることを願い、著名な実業家の話や「男子志さえあれば徒手空拳でも成功はできる」というような話を常々していたという。

明治40年代生まれの例として、宮崎輝（明治42年生）の父は、長崎県の農村にしながら独学で漢籍を読みこなし学問を修めた「努力の人」で、輝を師範学校に進ませて教師にしようと考え、非常に厳しいしつけをしながら「学問を積んで世のため人のためになれ」といつも言っていたという。田中文雄（明治43年生）の父は、学歴はないが独学で小学校の正教員試験に合格して教育界に入り、長野県の一地域の名望家になった人で、子どもたちに対して、「信州の片田舎でわずかな田畑にしがみついているようでは、いつのまにか家がつぶれてしまう。親は子にしっかりした教育を行い、子供は親の意を体して刻苦勉励して生計の道を立てるべきだ」と常々言っていたという。

もう1つのパターンは、都市中間層に典型的に見られる、階層的再生産を視

野に入れながら一定の教育方針のもとに子どもの生活全体を包摂しようとする徹底した徳育である。開業医であった嶋田卓彌（明治34年生）の父は、自らが受けてきたイギリス式教育に基づき、子どもたちに対して「嘘をつくな、男子は卑屈になるな、時間厳守」としつけ、これらを破ると、頭を打つとバカになるからといっておしりをたたいていた。また、「お前たちが成人するころには、人手が貴重になり中流の家庭ではお手伝いさんは雇えまい」として、お手伝いさんや書生がいても、決してかれらに子どもの用事をさせなかった。さらに、夏休みには、「将来のために都会と違う田舎の生活環境を体験させることが必要」として子どもたちを門下生の郷里に預け、毎日かかさず両親に手紙を書いてよこすよう命じたという。

京大教授だった堀場雅夫（大正13年生）の父は、先に述べたように、雅夫が小学校を卒業するまでは高級文化に触れさせながら行き届いた教育的配慮のもとでのびのび育てていたが、彼が中学生になると厳格なしつけに転じ、彼に質素な生活を強いている。例えば、寮生活をしている雅夫のところまで訪ねてきた父が電車で自宅へ帰るのを見送る際、雅夫は父が電車に乗ったのを見届けてすぐに帰ってしまったところ、目上の人は見えなくなるまで見送るものだと言われたという。また、小学生のときの家族旅行では一等車に乗せてもらっていたのに、中学生になって父の出張に同行させてもらう場合は、父は二等車に乗り、雅夫は三等車に乗せられていたという。

以上、家族による「徳育」の実態について見てきた。大正期以降、母による徳育についての言及は増えるが、徳育が母に任せきりになっている例はほとんど見られず、全体を通して見れば、明治期から昭和初期まで父が徳育の中心を担っていた様子がうかがえる。

## 6-2. 体育

ここでいう「体育」とは、健康の増進や強靱な肉体の形成を目指して身体的発育を促そうとする働きかけを指す。家族による体育に言及されているのは3件のみであり、その担い手はすべて父である。

近代日本における家庭教育の担い手に関する一考察―「私の履歴書 経済人」からの抽出事例を用いて―（多賀）

足立正（明治16年生、父：庄屋）は、小学2年のときから、馬術が得意で剣道の達人であったという父によって剣道の手ほどきを受けている。佐藤貢（明治31年生、父：上級役人）は、小学4年で大病を患った後、体を鍛えるために父から牛乳配達をすることを勧められ、さらに健康が回復した後も父によって野球や剣道の達人のもとで厳しく鍛えられた。根本次郎（昭和3年生、父：小学校長）は、父が健康法として行っていた自強術という15分のストレッチ体操に兄とともに毎朝つきあわされており、それを自叙伝執筆時まで続けていた。

## 6-3. 世話

ここでいう「世話」とは、乳幼児期から成人して自立するまでの様々な身の周りの面倒を見ること指す。家族成員による世話に言及されているのは9件であり、その担い手はすべて母である。

母による世話に言及しているのは、明治31年生まれの佐藤貢を除けば、明治末期以降に生まれた著者ばかりであり、幼少期に父を亡くした中山善郎（大正3年生）を除けば、皆地方で息子の立身出世を願う層か、都市部の中間層および富裕層の出身である。世話については、あまりに日常的な営みであるために、その具体的な内容についての記述は少ないが、目立ったものとしては、16歳で和歌山から神戸高等商業学校に進学する際、神戸市郊外に家を借りて母も一緒に住んで身の周りの世話をしてくれたという北裏喜一郎（明治44年生、父：農村文化人）や、4歳で入院したときに、母が見舞いの度に病院の庭先で甘えさせてくれたり、健康のために小学校へ30分かけて徒歩で通っていたときに「毎日、途中まで送ってくれ、坂の下で私の姿が見えなくなるまで手を振っていた」といった八城正基（昭和4年生、父：薬局経営）の例が挙げられる。

こうした傾向は、明治末期に子育ての担い手が父から母に移行したとする先行研究の知見（沢山 1990b 他）と合致している。ただし、自叙伝に見られるこうした傾向には、時代が下るにつれて世話が母の役割へと特化されてきた側面と同時に、1人あたりの連載回数の増加や執筆時の社会情勢の変化が影響を与えた可能性も考慮しておく必要がある。明治生まれの著者の多くは、性別分業

が理想とされ自明視されるようになっていった高度成長期に執筆しており、連載回数も10回程度だったのに対して、大正・昭和初期生まれの著者の多くは、父親不在が問題にされたオイルショック後や、家事・育児が女性だけの責任とされることが問い直され始めたバブル崩壊後に執筆しており、連載回数も30回程度に増加している。したがって、明治生まれの著者たちは、紙幅の制限に加えて、母が子どもの面倒を見ることを自明視していたためそのことをあえて書き留めようとはしなかったのに対して、大正・昭和初期生まれの著者たちは、紙幅に余裕があったことに加えて、母による世話や配慮のありがたさを意識させられていたがゆえにそれらを比較的詳しく書き留めたことも考えられる。

## 7. まとめと考察

今回分析を行った自叙伝の記述から得られた知見を、特にその担い手の観点からまとめると、次のようにいえる。

第1に、全体的に見れば、母よりも父への言及が多いが、世代が若くなるにつれて母への言及頻度は高くなる。

第2に、『進路形成』全般への関与については、いずれの世代でも圧倒的に父への言及が多く見られる。

第3に、『知育』全般の担い手については、明治中期生まれまでの世代では圧倒的に父への言及が多いが、明治末期生まれになると父への言及と母への言及の割合が拮抗してくる。

第4に、「徳育」の担い手については、大正期後半生まれ以降の世代では、母への言及が増えるが、父も依然として重要な役割を果たしているとして言及され続けている。また、「体育」は父、「世話」は母という明確な役割の相違が見られるが、これらへの言及は少ない。

このように、特に『知育』全般と「徳育」「世話」の領域においては、明治末期から大正期に、学校教育の拡大と、性別分業を基本とする近代家族の形成・拡大により、その主たる担い手は父親から母親へと徐々に移行していったという従来の支配的な命題が支持される記述が見られた。

しかし、明治末期に父親たちが家族における教育から完全に撤退していたわけではないことも明らかになった。特に『進路形成』全般については、昭和初期まで父親主導であったし、「徳育」や「文化伝達」についても、昭和初期まで父親も母親に劣らず関与していた。

すなわち、「母の手による家庭教育」という規範が新中間層に浸透したとされる大正期以降も、父親は稼得責任のみに集中していたわけではなく、極めて積極的に家族における教育に関与していた様子が浮かび上がってきた。そしてそのことは、資本家層や家業を営む層に限らず、まさにそうした規範を体現した層とされてきた新中間層においても大筋において当てはまる。確かに、「家庭教育」が学校教育を補完するためのものであり、そのための日々の身の回りの世話や細かな教育的配慮を行ったのは誰かという点からみれば、その担い手は多くの場合母親だったことはうかがえる。しかし同時に、多くの場合、そうした「家庭教育」の基本方針を決定していたのは父親であり、母親はあくまで父親の取り決めた方針の枠内で具体的な教育を担っていたと言った方がよい。そして、特に富裕層や中間層においては、公教育制度を子どもの職業訓練および地位形成の手段として用いつつも、単なる学校教育の「下請け」といったレベルを超え、子どもの地位達成をより有利に展開することを見据えて、学校教育の不足を補うような教育が父親主導でなされている例も多く見られた。これは、大正生まれ以降の著者が、自分の父親としてのあり方を振り返り、家庭や子どものことは妻に任せきりだったとしきりに語るのとは対照的である。

この時代の父親たちが、それほどまでに子どもの教育に力を入れていた背景については、今後さらに考察を深めていく必要があるが、現時点で少なくとも次の2点が考えられるだろう。

1つは、旧民法下での家制度との関わりである。「父親の命令は絶対」という記述が、異なる時代の複数の自叙伝に見られるように、家族とりわけ家督相続人候補としての息子の教育に対する戸主としての父親の責任と権限がきわめて大きい点では、明治初期から昭和初期まで、また階層によってもそれほど大きな違いはなかったのではないだろうか。

もう1つの考えられる要因は、父親と母親の所有する教育資源の量的・質的違いである。中等教育以降の公教育制度が男女で異なり、教育終了後の人生行路も男女で大きく異なっていた時代にあつては、多くの家族において、息子の教育に視する教育資源をより多く持ち合わせていたのは母親ではなく父親だったのではないだろうか。

最後に、今後の課題を述べておく。第1に、「経済人」掲載の全自叙伝の分析である。今回は「経済人」掲載自叙伝のうち57サンプルのみを分析したが、まずは全自叙伝を分析して、同様の知見が得られるのかどうかを検証したい。

第2に、家庭教育の内実とその担い手を変化させていった社会的要因の考察である。具体的には、中等教育および高等教育進学率の変遷、各時代に親世代が受けた学校教育の内容や育児・教育書における言説と、実際にその子どもたちが受けた家庭教育の内容やその担い手との対応／非対応を足がかりに考察を進めたい。

第3に、「経済人」以外の自叙伝の分析である。上記の目的が一定程度達成された後には、女性、政治家や文化人等へと対象者を拡大していきたい。

#### 注

1) 本研究で近代に焦点を当てているのは、父親の子育て研究の歴史的空白期間を埋めることを意識してのことである。近年の日本では、父親の子育て参加を求める声の高まりを背景に、父親研究の興隆が見られる(石井クンツ 2013)が、研究対象とされる時代についていえば、ほとんどの研究は「父親不在」が言われ始めたオイルショックから現代まで(小玉 2001)の時代か、そうでなければ、武士階級を中心に、家職継承の責任を負う家長としての父親が子どもに対して初歩的な教授や身の周りの世話をすることは珍しくなかった(太田 1994)とされる近世を扱ったものである。

2) 「家庭教育」は、近代における公教育あるいは学校教育の成立に伴って、それらの対概念、あるいはそれらを補完するものとして生み出された近代的な概念(中内 1987, 小山 1990)である。ただし、本文でも述べているように、今回分析した事例の中には、学校教育の「下請け」のレベルを超えて、子どもの地位達成のために家族成員によって積極的に行われる教育的営みも多くみられる。したがって本稿では、家族における子育てのうち、単に学校教育に従属するもののみならず、学校教育の不足を補いつつ子どもの地位達成のために積極的に行われる教育的営みも含めて広く「家庭教育」と呼ぶことにする。

3) 本企画で取り上げられた著者の人数は、2012年までで700人以上にのぼる。なお、「経済

近代日本における家庭教育の担い手に関する一考察—「私の履歴書 経済人」からの抽出事例を用いて—(多賀)

人」に限られてはいないが、「私の履歴書」を資料とした先駆的な研究として尾中(1992)がある。

4) 全38巻は、第1期(1970~71年)に134人分を収録した全18巻、第2期(1986~87年)に34人分を収録した全6巻、第3期(2008年)に75人分を収録した全14巻と、3期に分けて刊行されている。

5) 「私の履歴書」以外にも、平凡社「日本人の自伝」シリーズ、日本図書センター「人間の記録」シリーズ、大空社「伝記叢書」シリーズなど、これまでにいくつかの自叙伝集が刊行されている。

6) 連載開始当初は1人につき10日ほどの連載であったが、その後少しずつ連載日数が長くなり、その分文章量も増え、1987年からは1人につき1か月ほぼ毎日の30回程度の連載になっている。

7) 対象者のうち、1人だけ極端に出生年が早い岡野喜太郎(連載時駿河銀行頭取:1864(元治元)年生まれ)と、1人だけ極端に出生年が遅い林原健(連載時林原社長:1942(昭和17)年生まれ)は、今回分析から除外した。また、1876(明治9)年生まれと1891(明治24)年生まれの著者はいなかった。こうして抽出された、1876年生まれと1891年生まれを除く各年生まれ1名ずつの計57人が分析対象となった。

#### 参考文献

- 広田照幸 1999『日本人のしつけは衰退したか』講談社。  
 石井クンツ昌子 2013『「育メン」現象の社会学』ミネルヴァ書房。  
 海妻径子 2004『近代日本の父性論とジェンダー・ポリティクス』作品社。  
 小玉亮子 2001「父親論の現在」“人間と性”教育研究協議会「男性形成研究」プロジェクト編『日本の男はどこから来て、どこへ行くのか』十月舎、122-148頁。  
 小山静子 1990「家庭教育の登場—公教育における『母』の発見」谷川稔他『規範としての文化—文化統合の近代史』平凡社、241-267頁。  
 小山静子・太田素子編 2008『「育つ・学ぶ」の社会史』藤原書店。  
 小山静子 2008『「育つ・学ぶ」の社会史に向けて』小山・太田編、前掲書、7-23頁。  
 中内敏夫 1987「家族と家族のおこなう教育—日本・17世紀~20世紀」『一橋論叢』第97巻第4号、55-80頁。  
 尾中文哉 1992「明治期における『子供の交換』と『試験』—「私の履歴書」の分析より」『社会学評論』42巻4号(通巻168号)、360-373頁。  
 太田素子 1994『江戸の親子』中央公論社。  
 沢山美果子 1990a「教育家族の誕生」『教育—誕生と終焉』藤原書店。  
 沢山美果子 1990b「子育てにおける男と女」女性史総合研究会編『日本女性生活史 第4巻 近代』東京大学出版会、125-162頁。  
 須藤功 2006『写真ものがたり 昭和の暮らし 6 子どもたち』農文協。

吉田昇 1953「自伝による家庭教育の研究」『野間教育研究所紀要』第10輯, 245-282頁.

追記

本稿は、科研費助成事業（基盤研究C）「近代日本における父親の家庭教育参加に関する歴史社会学的研究」（課題番号 25381151 研究代表者：多賀太）の成果の一部である。